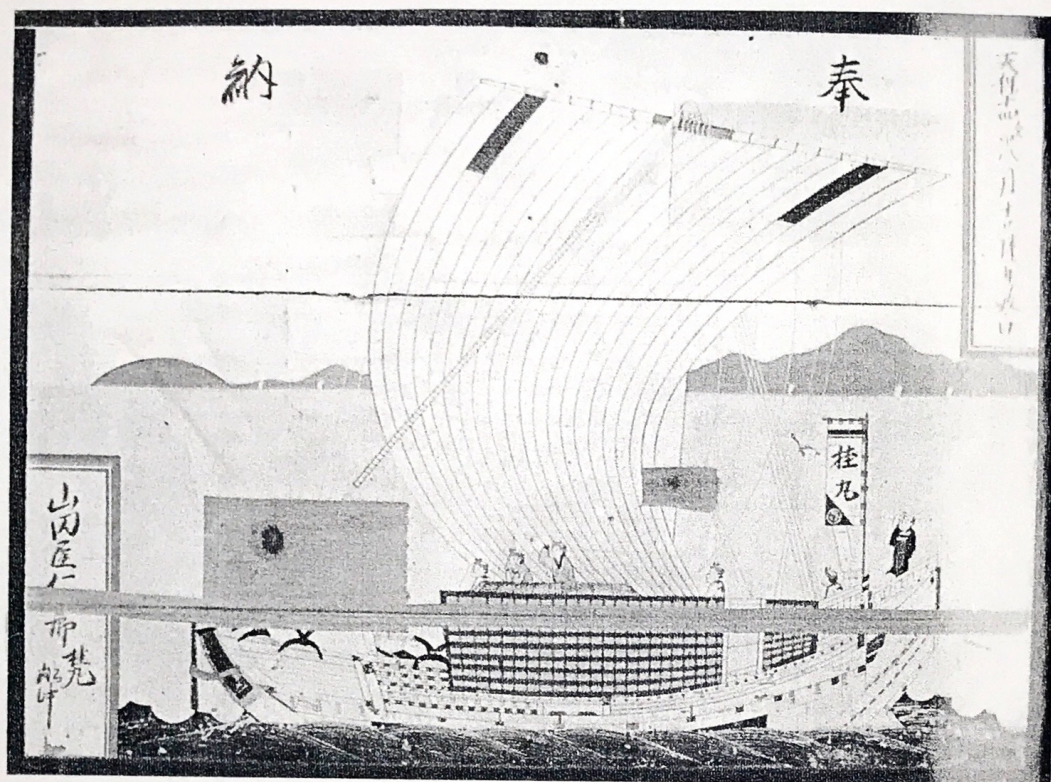


船絵馬からみた場所請負・山田屋



天保14(1843)年 山田屋仁口郎 桂丸船中 奉納
(春光山門覚寺・重要有形民俗文化財)

勇 武 津 資 料 館

担当 工藤 肇

和船の寿命； 平均四十年、その間に大小の修繕は勿論、遭難の事故も多かった。

蝦夷地への移入品； 米は津軽・羽後・越後・越中など、酒は出羽大山・越後・大坂、縄筥は敦賀・津軽、塩は瀬戸内海の各地、木綿物その他の雑貨類は大坂のその他の諸港からもたらされた。

千石の米運搬； 米千石運搬するのに、馬千二百五十頭・馬子千二百五十人（馬一頭に四斗俵二俵を積み馬子一人が手綱をとる、宿場での乗り継ぎ、その手間や人馬の食料など莫大なもの）必要だが、千石積船を使えば、一艘ですみ、船頭以下の乗組は十五・六人ですむ。天候に左右される。陸上輸送とは比較にならない高い能率と経済性をもっていた。

航路開発； 寛文十一(1671)年、河村瑞軒によって、太平洋側の東回り航路（房総半島迂回）が開かれ、翌十二年には同じく瑞軒によって、日本海側の西回り航路（下関・大坂経由）が開かれた。ことに西回り航路は北国海運と瀬戸内海船運を一貫した海運ルートを結んだ。

内地から蝦夷地へ入る港； 福山、江差、箱館の三港に限られ、それぞれ沖口番所あり、貨物出入の取締を励行し密貿易は禁止されていた。三港には問屋があつて他国へ移出し又他国より移入する貨物は必ず問屋の手を経て売買することになっていた。問屋は陸揚げした商品を蔵置するため、莫大な資金と広大な家屋と倉庫を必要とした。問屋が受取る口銭(クセシ)は売買代価の二分を普通とし、瀬戸物、鉄物、鯨等は三分、酒、材木、板、青物等は四分であった。（越崎 1957）

厚岸町国泰寺

蝦夷三官寺（善光寺・等樹院）の一つ、文化元(1804)年に江戸幕府により設置が決定された臨済宗の寺院で、北辺の地の精神的柱となるなど、特異な歴史性をもつ。

厚岸国泰寺・石造地藏尊像； 坐像(身丈70cm)、台座・台石からなる。アツケシ場所請負人・山田屋文右衛門が発願主となり、現地でなくなった朋輩縁者のために建てた。

（地藏尊正面） 天保第六末星(1835年)五月如意宝珠日

景運山国泰寺 現住五世文道叟造之

（正面向かって左側面）

施主 当所請負人 山田屋文右衛門

支配人 嘉 吉

通 詞 文太郎

（正面向かって右側面）

江戸引当所ヲ運送

松前 山田屋文右衛門手船

順吉丸 仁三郎 同 船方中 栄順丸 長右衛門 同 船方中

順通丸 徳右衛門 同 船方中 順真丸 勇 七 同 船方中

順悦丸 鉄五郎 同 船方中 幸順丸 長 吉 同 船方中

順力丸 文治郎 同 船方中

* この地藏尊は天保十四(1843)年三月二十六日の大地震で倒壊。

厚岸国泰寺・仏舍利塔； この塔は同寺六世となった伊勢原市池端蔵福寺の香国弁淵和尚が六カ国（トカチ領・クスリ領・アツケシ領・子モロ領・クナシリ領・エトロフ領）有志等の寄進を募り、天保十三(1842)年に建立した。石材は花崗岩で、房総半島の筑波辺りで切り出され、石材のまま運ばれた。運漕したのは山田屋の順悦丸・鉄五郎（郎）である。石工は箱館の善七、松前の二代長松。仏舍利は鎌倉の円覚寺より贈られた。願主は藤野喜兵衛・山田屋文右衛門・場所詰合中、各場所番人のあとに女性の名等がある。さらに供養の先亡者の戒名を記し、

船絵馬

「板子一枚下は地獄」、航海は苦難の業。航海に従事する人々は、難船・破船を免れて無事に航海を成し遂げたい、たとえ運悪く難破の危機に遭遇しても生命だけは助かりたいと神仏に加護をもとめ、切なる願いを絵馬にたくし、船主・船頭らが出身地などの社寺に奉納した。

その歴史は新しく、現存の最古の例は寛永四（1627）年の朱印船を描いた絵馬がある。画題は量的には幕末期から明治期の弁才船が圧倒的に多い。船舶画としての写実性は、長崎で描かれた近世前期の朱印船や南蛮船の絵馬がすぐれ、鎖国後では大坂の絵馬屋の作品が十八世紀末から弁才船を描いたものを中心に高水準に達し、船絵馬奉納を流行させた。

図柄は、自らの船のもっとも良いとする姿態、航行の状況、情景を主に描いた。もし、難破し、助かった時は、難破の状況を克明に描き、一命をとりとめられたのは神仏の加護のお陰であると報謝した。分布は、天保年間から増え、瀬戸内海から日本海側の沿岸に多いが、山間部にもみられる。総じて、古いものは船の背景に住吉大社や常夜灯を、新しいものは日の出を描いている。

船絵馬の資料的価値； 海運史・造船史・地域史・美術史・民俗学などの面から有効な物的資料としての価値が認められる。

ユウフツ場所と山田屋

寛政十一（1799）年一月、幕府は東蝦夷地浦河より知床までを七カ年間の仮直轄とし、場所請負人を廃して直接経営を行い、アイヌの撫育と授産を図り、国防（異国船対策等）・開発に取り組んだ。文化四（1802）年七月、西蝦夷地を松前藩から上知（土地を返納）し、全島を幕府直轄地とした。直轄地になると、シコツ十六場所の運上屋もユウフツ一カ所に統合され、運上屋を会所に改め、ユウフツ場所が成立した。

山田屋文右衛門有智（8代目）が栖原屋苫前場所支配人から独立し、ユウフツ場所を運上金二百五十両で請負ったのは、文政四（1821）年のことである。以来明治初頭に至るまでユウフツ・サル、アツケシの各場所などの蝦夷地、北蝦夷地にまで活躍の場を拡大し、蝦夷地最大クラスの場所請負人になった。特にユウフツ場所は、その足がかりとなり、経済・産業・文化等において大きな功績を残した。

北前船

上方及び瀬戸内方面では北前船と呼ばれたが、北前船の語義についてはいろいろな説がある。北国松前の略称なりとするもの、北へ前（ス）む船の意なりとするもの、北廻船（キタマワリ）の転訛からくるとするものなどがある。和漢船用集（金沢兼光著十二巻）によると、北国船は加賀、能登、越前、津軽、南部等の船也これを北前船又北国船といふ、俗呼んでドングリ舟といふは其形の似たるをいふなるべし。是をヲモキ造りと云、凡千石以上の舶也、と記されている。北前船は一本柱の和船で千石積或はそれ以上二千五百石積を最大とした。江戸時代は、米の経済（「米遣ひ」）の世であったので石（1石；40貫、10石；10立方丈＝1噸）を以て船の大小をいい表わし、米何石積を以て単位とした。

（越崎 1957）

弁才船・図合船； 弁才船とは、「百石（15トン）以上の船をして弁才となづくるものなり。巻中弁才泊りと志るすもの皆百石以上のかかり潤也」。図合船とは七十五石より九十五石迄の船いふなり。此船近場所通ひニ多く用ゆ。

（松浦 1999）

和船の大きさ； 帆の大きさでも表わされ、その単位を枚あるいは反と称し、一枚とは帆木綿幅二尺二寸物をさした。二十八枚形とか二十八反と呼び、これによってその船の石数が凡そ分かった。北前船の標準寸法は長さ八十尺（約26m）、幅二十四尺（約8m）、深さ八尺八寸（約3m）内外であった。ちなみに「千石船」とは数百石積から二千石積級の船を含む。

建造費用・日数・用材； 文久元辛酉年十一月吉日両徳丸新造勘定帳（加賀瀬越大家家）によると、千六百石積の「両徳丸」の費用は、壱千五百拾参両二分で、日数は十一月四日から翌年正月朔日（約2ヶ月）、用材は松・樺を使用している。当時、建造日数は概して三ヶ月以内であった様である。

場所 和人 禽獣
山海 各靈
夷人 鱗甲
善男子、善女子

運船

山田屋順悦丸 鉄五良 と特に大きく刻まれている。

- * 順悦丸がアツケシ湊に入湊したのは、天保十三(1842)年四月八日(仏誕会；釈迦の降誕した日)で、この仏縁に合わせて入湊した。翌年五月二十四日仏舍利を入塔、開帳法要を行った。なお、この塔は現在苔むして、多くの人名の判読はむずかしいが、各場所番人の名の中に「仁三郎」名を確認することができた(船名不確認)。

厚岸社嶺島弁天社・御戸張； 金堀、御宝前 奥州松前御城下 アツケシ御場所請負人 山田屋文右衛門手船 豊福丸 願主 船頭田村権之助 水主拾人乗 嘉永五壬子(1852)年干蘭月二十一吉辰

山田屋の手船(日鑑記ほか)

天保二(1831)・三(32)年(日鑑記)

神宮丸、栄順丸(天保三年、徳右衛門・国泰寺へ金巻朱寄進)、妙法丸

天保四(1833)年(日鑑記)

7月25日、山田屋手船新造順通丸入津、右船より土産物来る(国泰寺)

天保六(1835)年(日鑑記、国泰寺へ地藏尊像運搬)

順吉丸 仁三郎、栄順丸 長右衛門、順通丸 徳右衛門、順真丸 勇七、順悦丸 鉄五郎、幸順丸 長吉、願力丸 文治次郎

天保七(1836)年(箱館 田(山田屋春兵衛)・円覚寺金比羅堂勸化帳)

幸吉丸 平助 金百匹、順通丸 徳右衛門 栄順丸 長右衛門 順真丸 勇七 順悦丸 鉄五郎
幸吉丸 長吉 各々金五十匹

* 山田屋持ち船の船名は、古い船に「順」、新しい船に「豊」を多く使っている。

山田屋の主な船の概要

奉徳丸： 新造年不詳、乗組員四人、積高百五十石、船頭文治次郎(手船控)

願力丸： " " " 守吉(手船控)

豊秋丸： " 八人、四百五十石、 助右衛門(手船控)

順吉丸： " 十二人、八百石、 弥右衛門(手船控)、天保元(1830)年

に弥右衛門、国泰寺へ灯明料青銅貳拾匹(12/7)寄進、備物(白米壺升・備壺飾(12/25))、
匿船、天保二年に国泰寺へ金五十匹寄進、天保4年にも寄進。天保六(1835)年、仁三郎同
船の祈祷で金五十匹寄進。この年、仁三郎同船で国泰寺へ地藏尊像運ぶ

順悦丸： 文政九(1826)年新造、十四人乗、千石、船頭民蔵(手船控)、鉄五良同船で天保十三(1842)
年造立の国泰寺仏舎利塔用石材運ぶ

順順丸： 天保元(1830)年新造、十一人乗、七百石、船頭松右衛門(手船控)、深浦・円覚寺繪
馬(天保十四(1843)年、山田屋松右衛門奉納、410×585cm)

豊福丸： 天保十四(1843)年新造、十六人乗、千五百石、船頭田村権之助(手船控)、厚岸弁天
社御戸張銘(嘉永五(1852)年、水主十人)、安政六(1859)年北蝦夷地(樺太)で破船

豊風丸： 弘化元(1844)年新造、十六人乗、千五百石、船頭要左衛門(手船控)。安政六(1859)
年九月三日、「豊風丸先達ての時化ニてスツ沖ニて乗捨候処 マシケ領寄揚り候趣 尤作
事不相成由」(「安政六己未年 ヨイチ御場所見廻り日記」)

豊一丸(桂丸改)： 弘化元年新造、十七人乗、千五百石、船頭曾兵衛(手船控)、門別・稻荷

神社(順次郎)、深浦・円覚寺絵馬(天保十四(1843)年、仁三郎「桂丸」奉納、536×716
cm、仁三郎を後に曾兵衛と改め)、八森・白瀑神社石造鳥居(仁三郎、同年奉納)
豊通丸；新造年・乗組員・積高不詳、門別・稲荷神社(慶応元(1865)年、沖船頭安右衛門奉納)、
八人乗、二十反帆

* 手船控；山田文右衛門清富手船控帳

川内町検断所日記；安政元(1854)年、加州 文右衛門合船(四百八十九石積)

* 加州；加賀の別称

勇払・蝦夷地開拓移住隊士の墓内の山田仁右衛門建立墓碑

文久三癸亥(1863)年死亡之墓(砂岩、)

当番所番人各俗名 徳兵衛 鉄五郎 林 吉 與市郎 吉 泰 友 吉
施 主 山田仁右衛門

千歳市千歳神社・船絵馬；奉納者・船名等不詳(六人乗・八反帆・碇二・図合船?)

千歳市千正寺境内の山田屋金兵衛建立墓碑

安政二(1855)年卯五月日(砂岩)

俗名 南部蠣崎 寅三月死去(1842・1854?)

大室治左衛門

深浦 仙台屋政吉

弘化巳(1845)年死去

ユウフツ支配人 山田屋金兵衛

日高町門別・稲荷神社

門別漁港に近い、国道北側の高台に隣接する。慶応四(1868)年、去御場所 請負人 山田文右衛門・文治によって奉納された鳥居を初め、「稲荷神社」の大扁額や「牛若丸と弁慶の図」(吉本善京筆)・「安宅関の図」(安信筆、松村精之介・佐久間市之助奉納)・「・・・」(安信筆、山田文右衛門・山田寿兵衛奉納)の大絵馬、「豊通丸」・「桂丸」の船絵馬、俳諧額「前句集」(評者 如水)などがある。

船絵馬 豊通丸；山田文右衛門手船 船頭安右衛門

* 慶応元(1865)年奉納、八人乗?二十反帆、蛇腹垣、碇三頭(裏にも三頭)、帆印、嘉永六年(1853)頃は清富の弟寿兵衛の持船

船絵馬 桂丸；山田屋手船 船頭 順次郎 船中

* 二十四反帆、八人乗り、天保十五(1844)年「日鑑記」に船名ある、蛇腹垣、碇三頭(裏にも三頭)、帆印、背景(住吉大社?)と常夜灯、仁三郎乗りより古式タイプ。

津軽深浦・春光山円覚寺

津軽の風待つ避難港(弘前藩の四浦の一湊)として知られる深浦町の古刹で、船主や船頭から「濶口観音堂」とよばれてきた。湊の入り口にあって渡海安全・商売繁盛を守護する「観音様」として信仰されてきた。同寺には国指定重要文化財になっている薬師堂内厨子(青森県最古の木造建造物)や奉納海上信仰資料)などがある。海上信仰資料は船絵馬七十点、髻額二十八点、舵雛形二点など百六点である。

船絵馬 順願丸；天保十四癸卯(1843年)四月吉日

奥州松前箱館 山田屋 松右衛門乗

＊ 天保元(1830)年建造、十一人乗り、七百石(70ト)、船頭松右衛門
船絵馬 桂 丸； 天保十四癸卯八月吉日敬白
山田屋 仁三郎 桂丸船中
＊ 六人乗？蛇腹垣、碇三頭（裏にも三頭）、帆印

秋田県八峰町・白瀑神社境内鳥居（花崗岩）

右柱 天保十四癸卯(1843年)三月吉日
施主 世話人 武田曾兵衛（仁三郎）
左柱 海上安全
松前 一桂丸船中
氏子中

山田屋の二人の船頭

仁三郎； 六代目曾兵衛武田仁三郎源喜齊。武家。初代武田曾兵衛は宝永三(1874)年頃に八峰町滝ノ間村に居住。寛政十二(1800)年頃の生まれ。文政(1818～29年)の初め、高田屋大福丸船頭佐之助に見込まれて船乗りとなったが、高田屋の船欠所で、松前栖原屋に移り、その後山田屋に入ったようである。天保六(1835)年、景運山国泰寺・現住五世文道造之地蔵尊に山田文右衛門手船・順吉丸 仁三郎の名を刻む。同年七月、文道和尚に順吉丸仁三郎名で船祈祷「風順雨調海上安全」を依頼、初穂料金五十匹寄進する。天保八(1837)年四月廿三日にも文道和尚に船祈祷を依頼する。祈祷料金百匹。同月廿六日、文道和尚隠居につき、和尚の所持品をいただく。「盃猪口 壺個 長崎茶碗 壺個 手拭 壺筋 鍛冶屋仁三郎江」。天保十四(1843)年三月（44歳頃）、白瀑神社に一对の鳥居を奉納（施主 世話人 武田曾兵衛 松前一桂丸）し、さらに同年八月には、深浦・春光山円覚寺に船絵馬「桂丸」奉納する。天保年間(1830～43)には西国三十三の霊地を訪ね、滝ノ間観音森に三十三体の観世音を安置する。山田屋の職制では、支配人一小頭の下での鍛冶屋職である。

鉄五郎； 天保二辛卯(1831)年九月、「夷国船渡来之砌（きり）格別骨折為致候ニ付」、景運山執事松堂和尚より山田屋の番人並びに夷人男女三十九人が「合金拾三両壺分式朱」をいただく。この中に「金式朱 番人 鉄五郎」の名がある。天保六(1835)年、景運山国泰寺・現住五世文道造之石仏に名刻む（山田文右衛門手船 順悦丸 鉄五郎）。天保七(1836)年、深浦・円覚寺金比羅堂再建に順悦丸鉄五郎、金五十匹寄進する。天保八(1837)年四月廿六日、文道和尚隠居に伴い所持品の紺足袋壺足いただく。この時の職名は鍛冶屋。天保十四(1843)年、景運山国泰寺・現住五世文道造の佛牙舍利塔に山田文右衛門手船の一番目に順悦丸 鉄五郎の名ある（同塔用の石材運搬）。職制では仁三郎と同じ小頭の下での鍛冶屋職である（「日鑑記」）。文久三(1863)年には、ユウフツ場所で麻疹にかかり亡くなった、と考えられる（山田仁右衛門建立墓碑）。

「蝦夷地開拓移住隊士の墓」の山田屋墓碑の意義；

- ① 墓碑に刻まれた鉄五郎は古文書等に散見。
- ② 鉄五郎が勇武津場所請負人山田文右衛門（支配人山田寿兵衛）持船の船頭だった。
- ③ 鉄五郎を含む、墓碑に刻まれた市井の人々の事績を探し出すことによって、墓碑の意義が加味されてくる。
- ④ 今までよく知られていなかった山田屋の船頭である仁三郎の事績が分かってきたことにも地域史を究明する上で意義があるのではない。

北前船寄港地

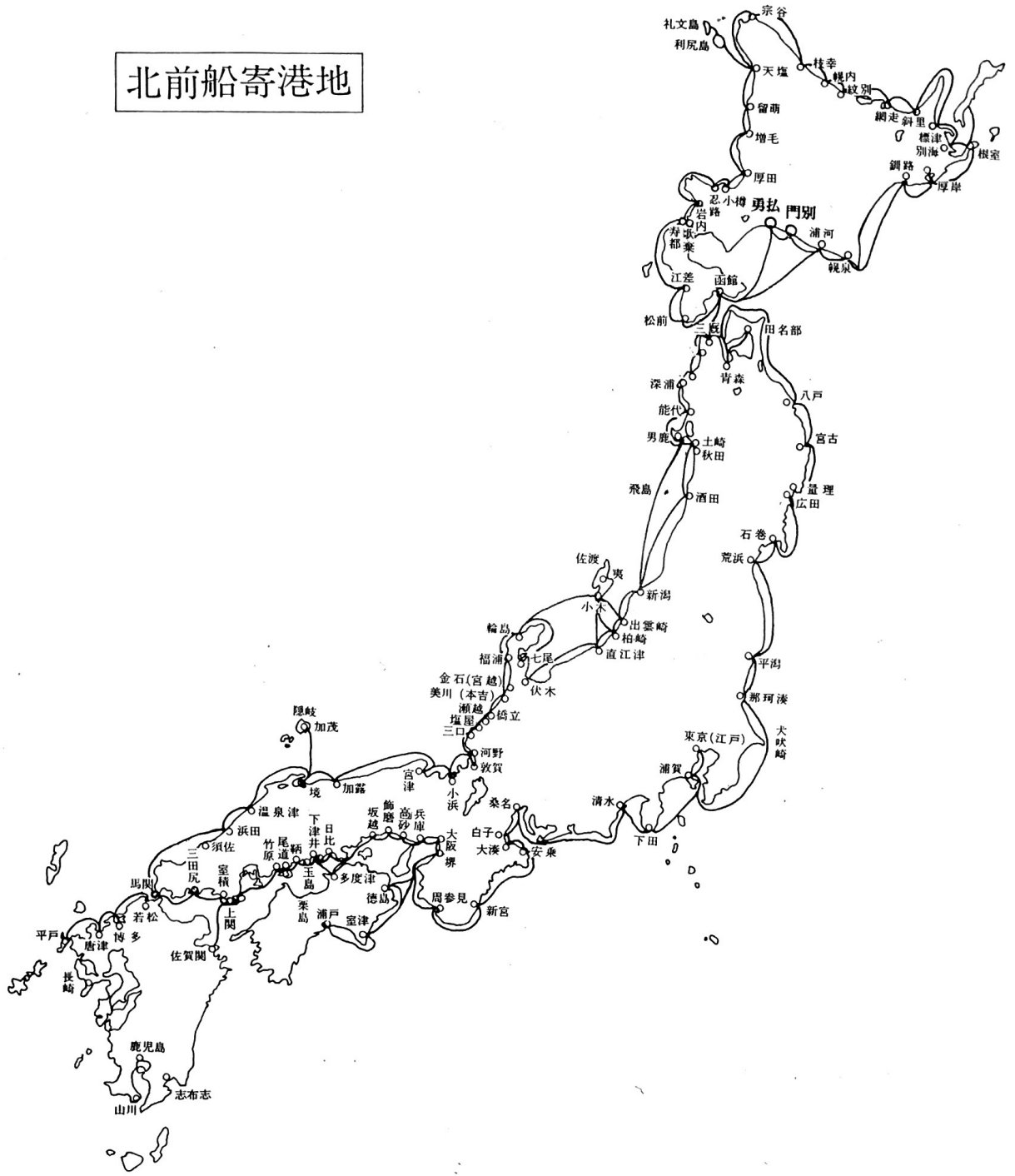


図1 北前船寄港地(牧野ほか 1977)

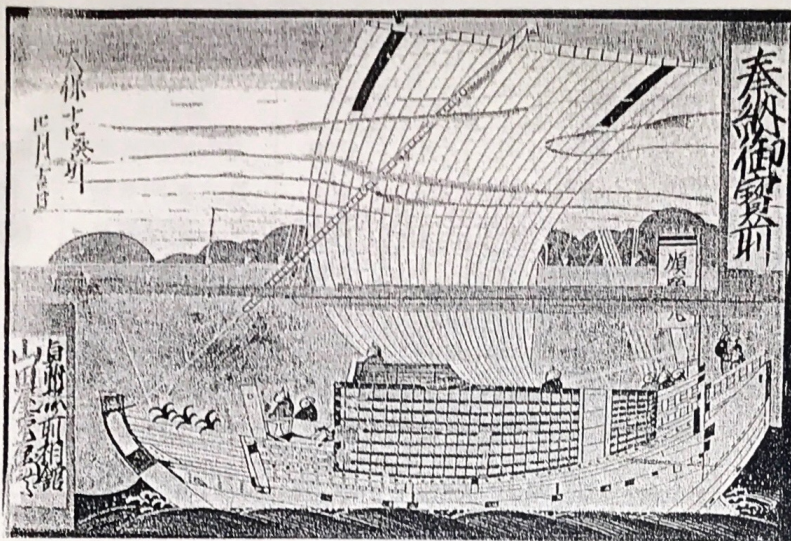


図2 船絵馬・天保14(1843)年山田屋松衛門奉納 順願丸

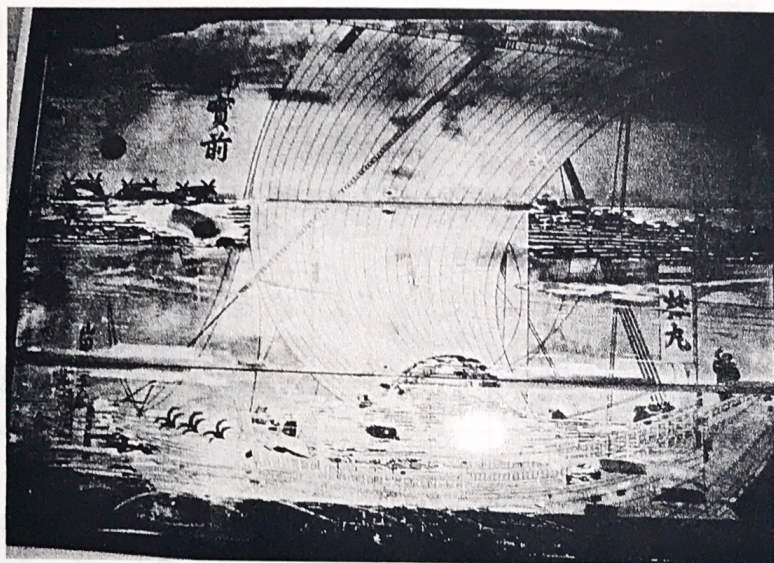


図3 船絵馬・山田口手船順次郎 船中奉納 桂丸

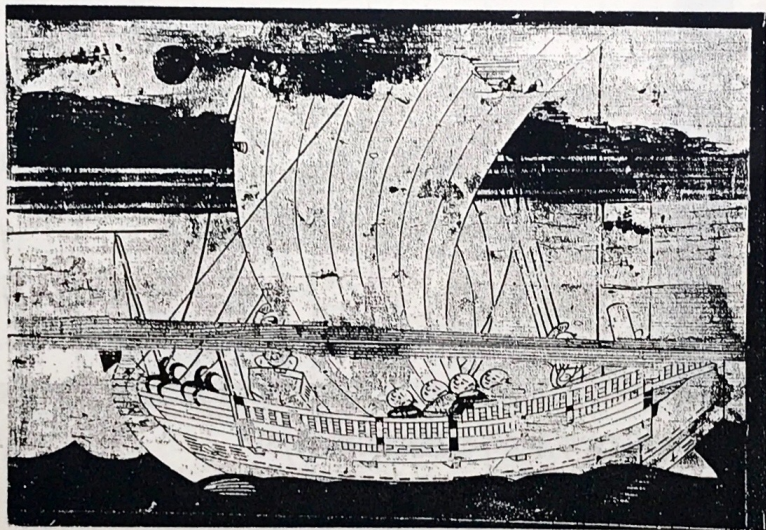


図4 船絵馬

実積石数	帆の反数		
	前期	後期	末期 北前船
100	7	10	11
200	10	14	14
300	12	16	16
400	14	18	17
500	16	19	18
600	17	21	19
700	18	22	21
800	19	23	20
900	20	24	22
1000	21	25	23
1200	23	27	24
1500	26	29	26

図8 北前船の実積石数(須藤 1968)

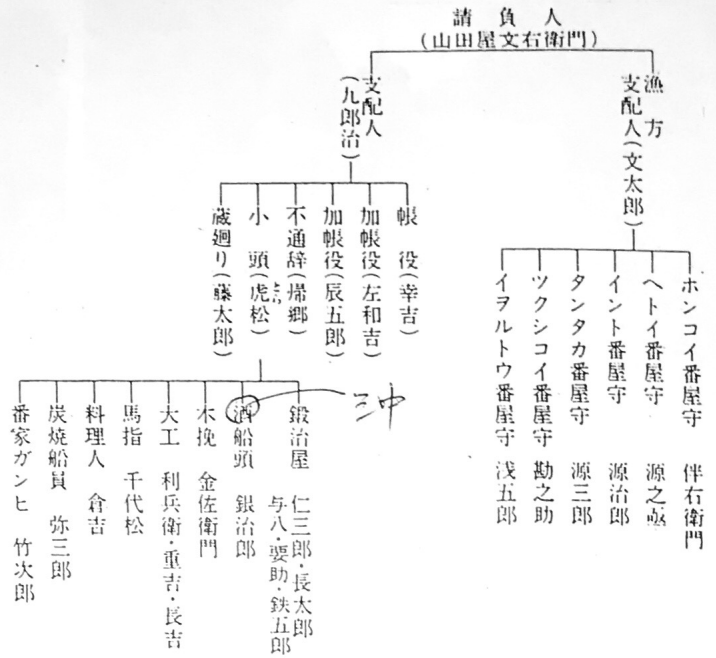


図7 山田屋文右衛門組織図(日鑑記)

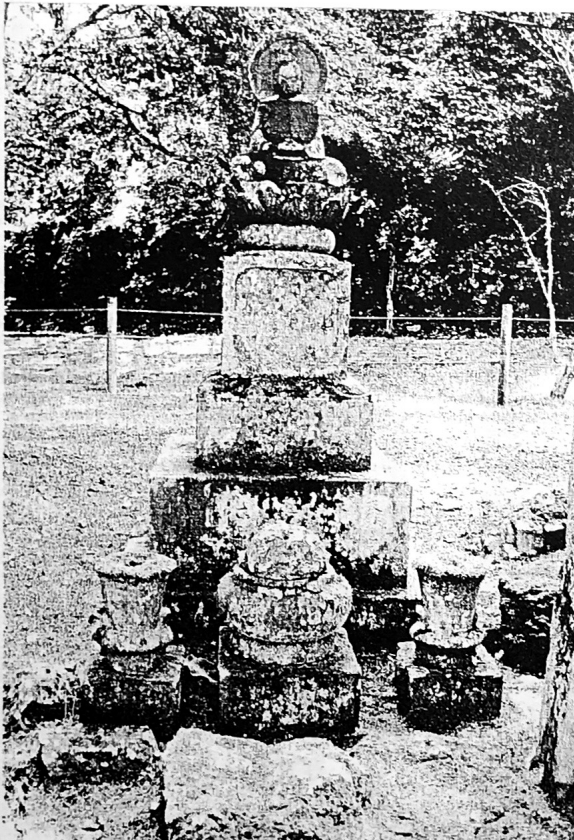


写真1 国泰寺地藏尊

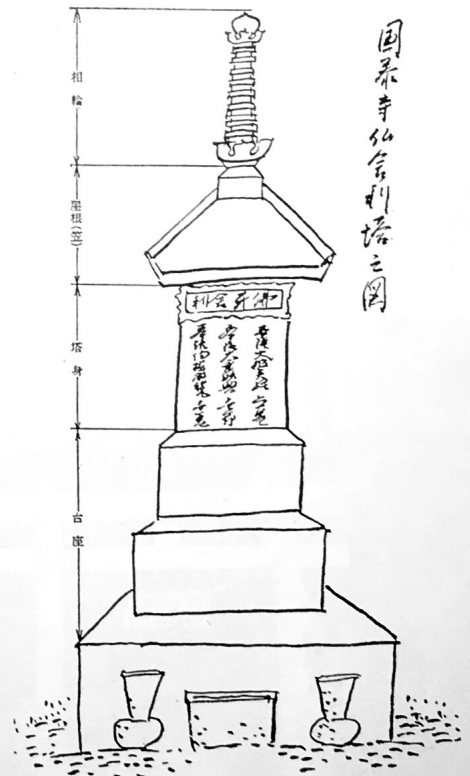


図9 国泰寺仏舎利塔之図

(伊勢原市教委 1981)

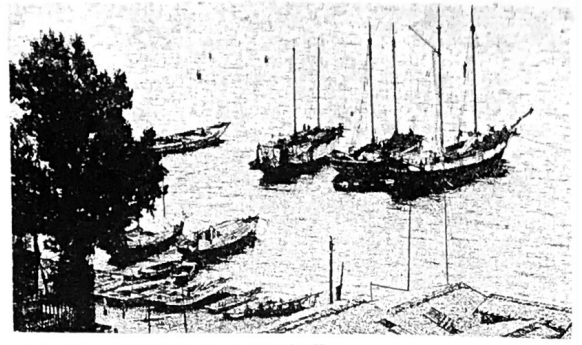


写真3 明治時代の深浦港

(青森県立郷土館 2007)

写真2 深浦・春光山円覚寺本堂(観音堂)

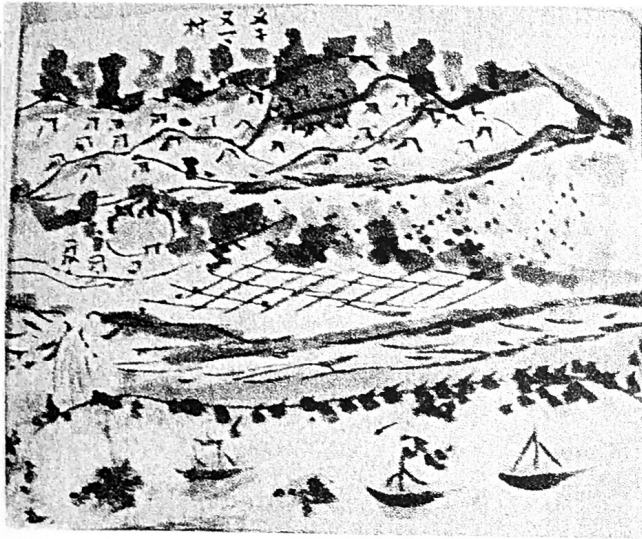


図10 タキヌマ(滝ノ間)村の図

(加賀屋伝蔵文書館)



写真4 八峰・白瀑神社鳥居(柱)

写真3 八峰・白瀑神社鳥居

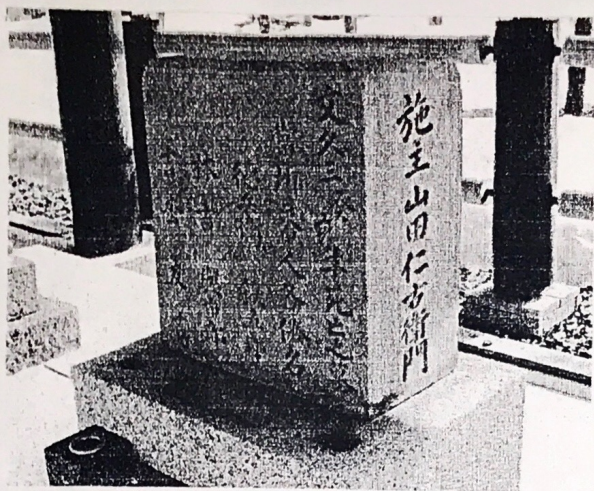


写真5 墓碑・文久三(1863)年死亡之墓
(ユウフツ場所)

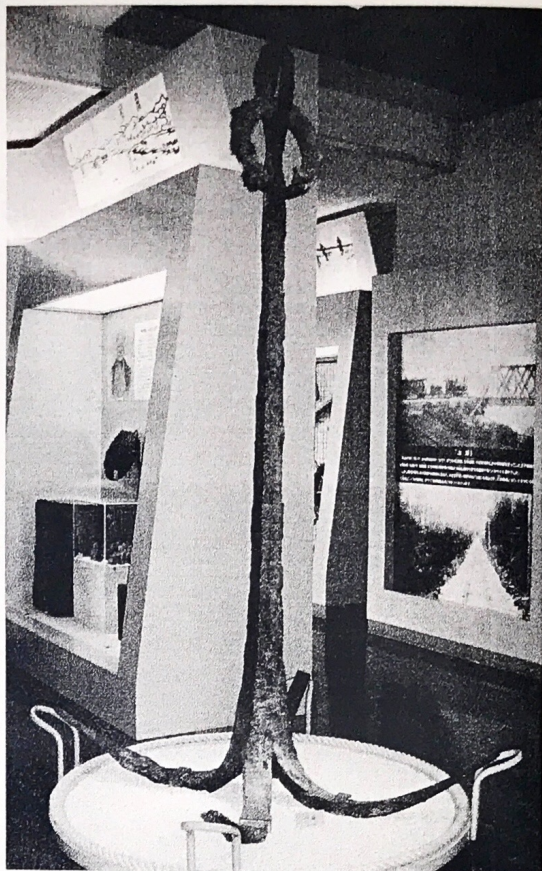


写真6 北前船の碇(博物館蔵)

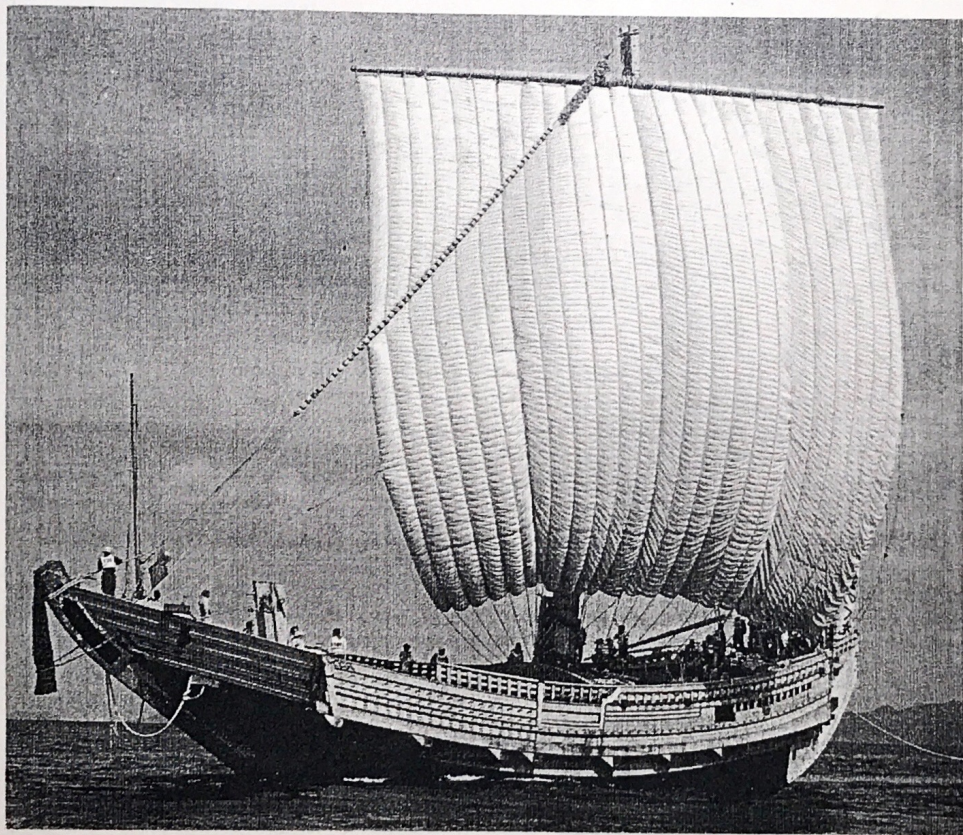


写真7 復元された「みちのく丸」(青森県立郷土館 2007)